

れるほどであった。揚水ポンプの故障もあり修理に手間取ってやっと揚水もでき危機を脱した。ようやく稚内港にはいることが出来たのは翌日の午後四時頃で、普通なら十時間位の航路が二十一時間の長時間を要した。不安で誰一人として一睡もしておらず、稚内に上陸したときは全員へとへとに疲れ果てて歩くのがやっとであった。

赤岩から出港した途中で樺太の二丈岩から能取岬あたりでやはり脱出してきたと見られる無動力船を三、四隻見かけたが、その後どうなったのであろうか……。あれだけの風雨とおおしけであり、おそらく波に吞まれてしまったのではないかと思う。

全員無事を喜び合って各自目的地に向かうことになった。我々も稚内に一泊後、目的地の網走に着いたのは昭和二十年九月二十五日であった。私達は先に引揚げていた母や姉の家族、妹や弟達と無事の再会を喜び合い、それからは総勢十七人で一軒の家を借りて住んだ。引揚家族の苦しい生活が長い間続いた。

漁業を始めたのが幸いなことに父が樺太で漁業組合長をしていたこともあったため、樺太庁の水産課長であっ

た人から漁網の引揚者用の割当ての紹介を受けることが出来た。少しではあったがそんなことも幾らかの役に発った。

それから今日まで四十数年変ることなく漁業に従事して来たが良好な漁場は既存の漁家が占めていて、悪条件も重なり経営困難が何年も続いた。

漁業改革があっても歩合は小規模で既存の漁家とは相当の差があった。かえって漁業の経験のない者が組合を作って漁業経営した者達が早く成功したようだ。

今、父母は死亡して私自体も老人の内にはいったが、どうやら安定した生活が出来るようになった。

## 小学校四年生の終戦の思い出

北海道 小野寺 信子

私は昭和八年に真岡で生まれました。小さい時に父から話を聞かされまして、年号はよくわからないけれど、支那事変だと思えますが奉天に戦争に行つて、無事母の待

つ真岡に帰って来て、暫くして私が生れ、小さきときは真岡で暮し、そのときは父は王子製紙工場に働いて、母は床屋を経営していたそうです。その内に病気になる、店はやめて、父の仕事のつごうで今度は真岡から塔姫町という町に引越し、私は小学校にはいる。三年生ぐらいまでは何の不自由もなく暮し、四年生頃から戦争が始まる話があり、子供でも飛行機の油を作るのに仕事に行かなければならず、母が病気のためその後学校をやめたのです。

それから間もなく戦争が終わりソ連機はくるし、焼夷弾は落ちるし、夜もろくにねられないようなありさま、それで私達親子は押入の中に入って、これで最後かとも思い父・母、私と三人でお別れのさかずきをして、これから三人がばらばらになるかも知れず、気持だけはしっかりして行くように父から言われました。

初めは防空壕にはいったが、間に合わずその内にはもういつ死んでもと思いつつ、防空壕に逃げ込む。その内に艦砲射撃で足が片方なくなったり、病気の人がだんだんと防空壕にはいつて来ました。少しおさまったか

と思ひ私達は行かないけど、元気な人達はみんな山を越え、谷越えて、避難して行きました。するとその列を空から敵機が機銃掃射や爆弾を投下するので大変でした。頭がとんだら、あとで近所の人達の話で帰ってこない人もいました。

私達は母が歩けないため、逃げないで毎日野宿の生活でした。山で暇を見ては食べ物をはんどうでたき食べる始末。夜は寒くても火はたかないとやられてしまうし、そうしている内にラジオのニュースに今長崎にはB29が原爆をおとして大変だといって、その後日本が負けたという知らせをラジオで知り、家に帰る仕度をしていると、みんな避難して山も里も日本人は避難していないところに、初めて見るオートバイに乗ったロシア人の兵隊のりっぱに胸には勲章をたくさん付けて来てびっくりしました。それで父がすぐに白いタオルを広げて手を上げて降参をしました。すると家に帰りなさいと言って手まねでわかり、里には一番に山から帰ると、ロシア人の兵隊がたくさん上陸して来て、近所の人達も帰り、毎日家の前には、私は子供だから良いけど、娘いるかと言って

けんじゅう持って暫くの間は毎日番兵している。今度は私達は一日一日働かなければ食べ物が当たらず、私は十二歳でしたけど船に石炭の積み込みに、一番方、二番方、三番方と毎日働きに行かなければいけない。ソ連の船は毎日くる。十二歳で働きながら母は病気で入院大変です。戦後すぐ父は病死、母は入院、亡くなってもお寺さんは引揚げていない、近所の人達で鉄板に載せて焼く始末。子供ですから、義理の姉が嫁に行ってる家に引取られ、それでも働かないと食べられなく、ソ連の人の家には学校の先生が下宿して言葉は少し。そうしている内に引揚げの口が来て、私は日本は見ることがなく、どうでもここで死ぬ決心でした。姉の家の同居人として連れてこられた。それも私は塔路から恵須取へここから船に乗り真岡に行き、真岡ではまた船に乗るまでの日にちは長く、色々な仕事をさせられ、病院の手伝いをしてお風呂にはいるのにも番兵がつき、身体には注射やD D Tを頭からかけられて大変でした。いよいよ、真岡から乗船する。着いた所は函館の弁天町に着き、親戚がいたので収

容所にはいらず、姉の所で七日くらいで、また奉公にだされ、親のいない子はとても淋しい思いで、そのときは十四歳、着のみのままで何も持たずにだされ、その家で大事にされたけど四年くらいで名寄に行き、今度は芦別、札幌とずっと働きつくめ。こんなに辛いのならと親を思い毎日泣いたものです。そして札幌で結婚してそんなこんなで人の話で引揚げのお金が頂けると聞き、代書さんに書いて頂き、それと月寒の区役所に三十七年頃に行ったら、証明になる物と亡くなったときの戒名がわからないとだめですと帰されたのです。私はこの五十八年間生きて来て、父母をソ連で亡くし、戦争で始まり戦争で終り、親のもらえるお金も頂かずに本当につらい思い。他人には親がないので、浮浪児と呼ばれてなきけない。今でも私の心には戦争は終わってないと思う。はだか一つで今は小さいながら店をやって食べるくらいはやってます。

本当に戦争はいやですね。でも今思うとソ連に残った人を見ると、私は帰って来て良かったと思う。あの方達はあの頃は丁度年頃の娘さんであの年になったのです

ね。私もこの九月になると父母が亡くなって丁度四十五年になります。早いものですね。

## 澱粉かすの思い出

北海道 小川 幸子

昭和二十年九月、江差、熊石と十数日を掛けて主人の親戚を探し歩き、函館在の砂原村に着きました。

八月四日大泊中学校の校庭の見える官舎で、長男「誠五」を出産しました。看護に来てくれていた母は、豊原の実家へ戻ることなく、婦女子、病人に対する強制疎開の命令で、私達親子と行動を共にすることになりました。八月で夏着それも着のままの姿で、荷物を出したという心強さもあり、少量のオムツと嬰兒の着替えだけを手荷物として、北海道へ渡りました。

中学校も三年生以上の者は残り、本土決戦をと上部の人は思っていたようで勿論、主人も残りました。

主人からは叔母の家に行くようにと言われましたが、

なかなかたどりつくことが出来ず、ようように尋ね当たるところ「そんな者は知らぬ」と言われ、途方にくれました。それでも情深い方の納屋に入れて頂き、三人が住むことになりました。

翌日からでも糊口するため働かなければなりません。都合よく蒲鉾製造所で雇ってもらう事が出来次の日より働く日々でした。当時の食糧事情は漁船を持つ人の多くは、本州まで出かけ、魚と交換に米を得ていたので配給が幾日もとどこおっても、さしたる痛みはない風でした。

裸一貫、まさに無一物の私達には大変きびしいものでした。親子三人で一日当たりの米の量は、小さな湯呑み茶碗にすりきり一杯もあったでしょうか。魚がたやすく手に入られることが最大の幸せでした、大根すぐりを手伝いそれを貰い、うちなりながら大きな南瓜などもあり、どうかいのちをつないでおりました。醤油も味噌も、また食器類など売ってもおらず唯一の調味料としては塩があるだけでした。くる日も、くる日も魚とほんの少しの野菜を入れた塩汁ばかり食べていました。